

## いわゆる人口問題の位相(5) マルクスの人口論(i)

著者	仲村 政文
雑誌名	経済学論集
巻	81
ページ	17-36
別言語のタイトル	Theoretical Thoughts on "Population Problems" (5) Marx's Theory of Population (i)
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/20139">http://hdl.handle.net/10232/20139</a>

# いわゆる人口問題の位相（5）

## ——マルクスの人口論（i）

仲村政文

### 目次

- . 論点開示
    - 1. 人口問題は“アポリア”か
    - 2. 人口変動の「転換」をめぐる
    - 3. 人口政策におけるイデオロギー問題  
(以上 第71号)
  - . 人口問題へのアプローチ  
——ゴドウィン・マルサス論争に寄せて
    - 1. 時代の精神  
(以上 第72号)
    - 2. ゴドウィン批判と「人口原理」
    - 3. ゴドウィンの人間把握と「人口論」  
(以上 第74号)
    - 4. マルサス人口論の基本的性格  
——「社会改良」の錯誤  
(以上 第77号)
  - . マルクスにおける人口論の展開構造
    - 1. マルサス批判の水脈とマルクス  
(以上 本号)
    - 2. マルサス人口論批判と人口論の方法
    - 3. 資本の本源の蓄積と「人口問題」
    - 4. 資本の運動法則と人口動態  
——相対的過剰人口論
  - 5. 小括：マルクス人口論の意義と限界
    - . 「人的資源論」の射程
    - . 人口変動の地域特性
    - . 少子高齢化「問題」の歴史的位相  
——結びに代えて
- III. マルクスにおける人口論の展開構造
- 1. マルサス批判の水脈とマルクス  
(1)

この委員会 [救貧院の委員会] の連中は、非常に賢くて、達識で、哲学的な人々なので、救貧院に注意を向けると、直ちに、普通のものにはわからないことを発見したのである。つまり、貧民は救貧院がすきなのだ。救貧院こそ、貧民階級のための、公設の娯楽場、金を払う必要のない宿屋であり、一年中ただの朝飯、昼飯、おやつ、夕飯があり、遊んでばかりいて、働かないですむ、レンガと漆喰の極楽である。……そこで、彼らは規則をつくった。あらゆる貧民は、救貧院にはいって、じわりじわり餓死させられるか、それとも、救貧院にはいらなくて、たちまち餓死させられるか、どちらかを選ぶべしとしたのである。<sup>1</sup>

われわれはこれまで、ゴドウィン・マルサス論争をとおして、マルサス人口論の基本的性格——独特の「人口の原理」の定立と、これを梃子にした生存権・被扶養権の否定 = 救貧法批判

<sup>1</sup> Charles Dickens, *Oliver Twist*, 1838. Cleartype ed., New York, 1868. P.10. 中村能三訳『オリバー・ツイスト』（新潮社）上巻、23ページ。訳は一部変えた。

——について吟味した。このようなマルサスの「理論」と思想を根底から批判したのは、いうでもなく、マルクスとエンゲルスであるが、これに先行する批判の水脈をわれわれは看過できない。マルサス人口論批判は多岐にわたるが<sup>2</sup>、われわれは何よりも、マルサスの思想の核心をなす 過剰人口と貧困 をめぐる問題に刮目したい。

上の一節は、この問題にかかわる素材として掲出したものである。ここに敢えてチャールズ・ディケンズの小説『オリバー・ツイスト』から引いたのは、マルクスものべるように、「イギリスの小説家の生き生きとした、雄弁な作品は、あらゆる職業的な政治家、政論家、道学者たち全部をあわせたものが口にしたよりもはるかに多くの政治的・社会的真実を世間に伝えてきた」<sup>3</sup>（下線は仲村）のであるが、「民衆の友」と呼ばれるディケンズの『オリバー・ツイスト』こそは、過剰人口と貧困にかかわるマルサス批判の最たるものと考えからである。

この一節は、主人公の少年オリバーが救貧院に連れてこられたとき、その処遇に関連して記述されたものであり、一読して明らかなように、当時の貧困問題の象徴的存在である救貧院（workhouse）の「政治的・社会的真実」（実相）が風刺的に描写されている。まず、「貧民は救

貧院がすきなのだ。救貧院こそ、貧民階級のための、公設の娯楽場、金を払う必要のない宿屋であり、一年中ただの朝飯、昼飯、おやつ、夕飯があり、遊んでばかりいて、働かないですむ、レンガと漆喰の極楽である」というくだりに指目するとよい。これは明らかに、マルサス主義者の主張するところを揶揄して書き込んだものである。ディケンズはここに、1834年改正の新救貧法に対する自らの思想的立場を一気に——暗示的にはあれ——表白しているのである。

次いでディケンズは、具体的に救貧院の凄まじい実態を描写する。救貧院の「規則」によれば、食事は「毎日三度三度、薄い粥と週に二回玉葱を一つと、日曜日にはパンを半片」である。オリバーは「ひもじさで絶望的」になり、勇気を奮って「すみませんが、ぼく、[粥を] もっと欲しいんです」と哀願するが、頭を殴られ、羽交い絞めにされるという有名なシーンが展開する。

ここで看過できないのは、こうした描写のなかに次のような一節が挿入されていることである。「食べる肉も酒も胆汁と化して、酷薄無残になるのみ、血は氷のごとく、心は鉄のごとき飽食暖衣の哲学者に、犬さえ見むきもしないご馳走にかぶりつく、このオリバー・ツイストの姿を見せてやりたい、とわたしは思う」<sup>4</sup>（下線は仲村）。ここには作者である「わたし」（ディ

<sup>2</sup> この点についてはさしあたり、次の著作、論稿を参照のこと。J.ボナー『マルサスとその業績』（堀経夫・吉田秀夫訳、改造社、1930）第四篇、吉田秀夫『マルサス批判の発展』（弘文堂書房）1933、同「マルサス以後の人口論」（百年記念『マルサス研究』小樽高等商業学校研究室、清水書店、1934、所収）。ただし、これらにおける視点・着眼点は本稿とは大きく異なる。

<sup>3</sup> K. マルクス「イギリスの中間階級」（『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』1854. 8.1付）『マルクス=エンゲルス全集』大月書店 [以下、『全集』と略す]、第10巻、655ページ。続けてマルクスは、そうした小説家の一人としてチャールズ・ディケンズの名前もあげている。そして、ディケンズもその一人である「中間階級の文筆上の代表者たち」は当時の「中間階級」のあらゆる階層について叙述し、「無遠慮、虚飾、けちな横暴、無知だらけ」として描いたと批評している。なお、ディケンズにおける階級（階層）把握の問題を社会移動の観点から考察したものとして、次の論稿を参照のこと。Keiitiro Ihara, “Dickens and Class: Social Mobility in *Our Mutual Friend*.”（『英語英文学研究』第43巻、1993.3）

<sup>4</sup> 『オリバー・ツイスト』（前出）、53ページ。

ケンズ)の主観的な想いがあからさまに表出し、ディケンズの怒りの感情が露出している。このことはきわめて異例であるといわざるをえないが、ディケンズの幼少時における貧困体験が投影しているのであろう。いずれにせよ、この小説においてディケンズは、救貧院の実態を「告発」しつつ、痛烈にマルサス（マルサス主義）を批判しているのである。なお、「血は氷のごとく、心は鉄のごとき飽食暖衣の哲学者」はマルサス主義者と読み替えることもできよう。因みに、『オリバー・ツイスト』の訳者は「解説」において、救貧院は当時のイギリスの「富裕階級の良心」であったとし、ディケンズの批判と揶揄的になったのは、この制度の「根元的な無力さ」ではなく、それはこの制度の運営と、それを担当する人物にすぎないとしているが、以上の検討に照らして到底首肯しがたい。

ディケンズはさらに、多くの読者を獲得した『クリスマス・キャロル』において、生存権をめぐるマルサス主義の本質に迫っている。素っ気ない会話のシーンにおいて、ディケンズは見事にマルサス主義の「本質」を明らかにしているのである。その会話は、クリスマス当日、貧民への義金の寄付を求める「紳士」と強欲で冷酷な主人公（スクルージ）——後に改心するのだが——との間に交わされたものであり、それは次のようである。

「…怠けている連中を陽気にさせるような金もない。監獄と救貧院の運営を維持するために、ちゃんと高い税金を払っている。生

活できない連中はそこに行けばよろしい」「多くの者をそこに収容することはできんし、むしろ収容されるくらいなら死んだ方がましだと思おうでしょう」

「死を選びたいのなら——止めはせん。過剰人口が解消されてけっこうじゃないか」<sup>5</sup>  
(下線は仲村)

ここで刮目すべきは、まず、監獄と救貧院とが並んで顔をだしていることである。貧困を背景とする犯罪が頻発し、監獄は賑わっていたのであるが、その監獄は救貧院とともに、当時の貧困問題の象徴的存在だったのである。会話のなかに「高い税金」とあるのは、公的扶助の財源である救貧税を暗示しており、主人公はその負担についての不満を表明しているのである。そしてまた、義金の寄付＝慈善行為にも反対している。ここに救貧法に（そして、慈善にも）反対するマルサス（マルサス主義者）の“本音”の一端が、小説の主人公の口をとおして語られているといえよう。

“監獄”についてさらに留意すべきは、これは貧困者の“処罰”そのものに直截にかかわっているということである。この点についてマルクスは、次のようにのべている。「……イギリス議会は次のような見解をとっている。極貧状態は労働者の自業自得の貧困であり、したがってこれを不幸として予防するのではなくて、むしろ犯罪として禁圧し処罰すべきである、と。こうしてワークハウスすなわち貧民労役所〔救貧院〕の制度が生まれた。」<sup>6</sup> そうであればこそ、

<sup>5</sup> 『朗読によるクリスマス・キャロル』井原慶一郎訳、K&Yカンパニー、2011、17-18ページ。この書はディケンズ自身によって朗読用として圧縮されたものである。なお、引用にあたり、振り仮名は略した。

<sup>6</sup> K.マルクス「論文『プロイセン国王と社会改革——プロイセン人』（『フォルヴェルツ!』第60号）にたいする批判的論評」『全集』第1巻、435ページ。

救貧院は巷間において、「救貧法監獄 (Poor Law Bastilles)」と呼ばれていたのである。こうした救貧院についてマルクスは、「ブルジョアジーの慈善をもとめる貧困者にたいするブルジョアジーの報復と慈善とが、たくみに組み合わせられている」<sup>7</sup> というように、“たくみに” 言い表わしている。マルサスの人口思想にあつては、すでに言及しておいたように、貧困は「自然の処罰」にほかならないのであり、したがって、現実の救貧院 (救貧法) は一面において、この思想を体現したものともみることできよう。

さらに上の会話において、「死を選びたいのなら——止めはせん。過剰人口が解消されてけっこうじゃないか」とのべられている点もまた、看過できない。驚くべきことに、このセリフはエンゲルスの次のような叙述と完全に重なり合っているのである。「金持ちには [ベストによる] 一七人の死に同情はない、関心はない。『過剰人口』が一七人だけ減るということは、社会の幸福ではなかるうか? もしけちくさい『一七人』などではなくて、二〇〇 - 三〇〇万人が死んだのだったら、なおさらよかつたであろうに。——これがイギリスの富裕なマルサス主義者の考え方である。」<sup>8</sup> この一節は、エンゲルスが「事実をはっきりと正視している」と評するトマス・カーライル (1795-1881) の『過去と現在』(1843) を論評するなかでのべたものである。

そもそもマルサスにあつては、すでに触れた

ように、悪徳と悲惨を生みだす「不健康で不道徳で不幸な人口」は「余分な人口」であった。したがって、ディケンズとエンゲルスが、飢餓や病気による死亡は「過剰人口」の減少という点において、マルサス主義の歓迎するところであると評定するのは、決して当を失するものではない。この言説はある種のカリカチュアにほかならないのであるが、マルサス人口論の帰結するところを鋭利に摘出しているといえよう。われわれはここで改めて、すでに引用済みの、“自然の饗宴” についての一節 (本稿のシリーズ (4)、本誌第77号、29ページ、参照) を想起するとよい。その一部を再度引用すれば、「……社会が彼の労働を必要としないならば、食物のひとかけらさえも要求する権利 (right) をもたない。したがって、かれは事実上、存在する権利をもたないのである。……」<sup>9</sup> と。ここでもまた、われわれは、「…… [マルサスは] 資本の残忍なものの考え方に残忍な表現を与えた」<sup>10</sup> とするマルクスの論難を思い起こさざるをえない。

こうしてみると、「あらゆる貧民は、救貧院にはいって、じわりじわり餓死させられるか、それとも、救貧院にはいらなくて、たちまち餓死させられるか」という、前出の風刺的な表現が真実味を帯びてくる。ディケンズは人間と社会の真実 (事象の本質) をアイロニーによって塗しながら的確に描きつつ、物語を織り成しているのである。

<sup>7</sup> 「論文『プロイセン国王と社会改革——プロイセン人』(『フォルヴェルツ!』第60号) にたいする批判的論評」(前出) 435ページ。

<sup>8</sup> F.エンゲルス「イギリスの状態 (トマス・カーライル『過去と現在』)」『全集』第1巻、581ページ。

<sup>9</sup> T.R. Malthus, *An Essay on the Principle of Population; or A View of its past and present Effects on Human Happiness; With an Inquiry into our Prospects respecting the future Removal or Mitigation of the Evils which it occasions. The Version published in 1803, with the version of 1806, 1807, 1817 and 1826*, Edited by Partorica James, Vol. , p.127

<sup>10</sup> K.マルクス『1857-58年の経済学草稿』(マルクス『資本論草稿集』[以下、『草稿集』と略す]) 331ページ。

R.ウィリアムズによれば、産業革命の後、非常に曖昧である事象を見抜くために、新しい形式が工夫されなければならなかった。これに応えるべくディケンズは常に、見えないものをみるためのフィクションの形式をみつけようと努めたという<sup>11</sup>。『オリバー・ツイスト』にあっても、ディケンズは救貧院の実態のみでなく、民衆の貧困、アルコール中毒、不潔な街などをヴィヴィッドに——そしてまた、風刺的に——描くことにより、社会の「真実」を剔抉しているといえよう。こうして『オリバー・ツイスト』および『クリスマス・キャロル』は、マルクスのいう「生き生きとした雄弁な作品」となっているのである。これは社会科学による客観分析によっては到底なしえないことであり、かくして、マルサス批判の水脈において大きな地位を獲得しているといえよう。

(2)

ディケンズはこのように、マルサスにおける過剰人口論とそれを理論的基礎とする生存権の否定に対して、物語（小説）という形式において批判の矢を放っているのであるが、このディケンズに先立って、いわゆる「文学者」たち——S.T.コールリッジ（1772-1834）、R.サウジー（1774-1843）、W.ハズリット（1778-1830）、W.ワーズワース（1770-1850）など——もマルサスの思想に嫌悪感を抱き、これを厳しく批判した。

これらの「文学者」たち（詩人、エッセイ

スト、小説家）について、H.A.ボナーは次のように評定している。彼らは、専門家やエコノミストと称する人びとや社会問題の研究者が、マルサスがつくりだした「剥き出しの餓死のイメージ」の前に屈したとき、まさにそのとき、そのイメージに対して孤独な闘いをおこした。そして、この闘いにおいて、「文学者」たちはその数において目立ただけでなく、「前衛」において指導的役割を演じたともいえる。「文学者たちの、この論争〔マルサス論争〕への貢献は少なく見積もっても、実際的な経済理論家に匹敵したと思われる。こうして、マルサスの亡霊（Malthusian specter）を追っ払う長い闘いにおいて「名誉ある地位」を保持しているのである。<sup>12</sup>

このボナーの評定に照らしていえば、マルサス批判の戦線におけるロマン主義者たちの貢献（役割）は、ディケンズに匹敵するといえよう。そして刮目すべきは、ここでもまた、「文学者」たちの果たした役割は、「経済学者」たちに劣らなかったということである。このことが可能だったのは、彼らが時代の精神を反映しつつ、社会的諸矛盾を認識して、これを文芸の一分枝である詩の形式において詠いあげたからである。ここには戸坂潤のいう「認識論としての文芸」<sup>13</sup>の一類型がみいだされるといえば、いい過ぎであろうか。

われわれは先に、フランス革命に共鳴しゴドウィンの思想に強い影響をうけた二人のロマン主義詩人——W.ワーズワースとP.B.シェリー——の民衆への愛（ヒューマニズム）について

<sup>11</sup> R.Williams, *Politics and Letters: Interview with New Left Review*, NLB, 1979, p.171.

<sup>12</sup> H.A.Boner, *Hungry Generations: the Nineteenth-Century Case against Malthusianism*, King's Crown Press, 1955, p.200.

<sup>13</sup> この点については、戸坂潤「認識論としての文芸学」『戸坂潤全集』第四巻、勁草書房、195ページ以下参照。

考察したが（本稿のシリーズ [2]、本誌第72号）、ここではマルサス主義と闘った「文学者」の一人としてのワーズワースについて簡潔にふれておきたい。

ワーズワースは、「マルサスの原理は、これまで富裕層が貧民に提起したもののなかでも最も利己的なものである」とするボウモント夫人の手紙にたいする返信（1831. 7. 8付）のなかで、次のようにのべている。「世界は人口過剰であるとするマルサスの言説を肯定することは馬鹿げている。他方、あたかも国民大衆が結婚前に子どもをどのように扶養するか熟慮する義務がないかのように語るのも大きな誤りである。……彼らが決して結婚すべきではないという理由もない」<sup>14</sup>と。

ここにみる言説を一読して明らかなことは、ひとつには、マルサスのいわゆる「絶対的過剰人口」論を批判しているということであり、ふたつには、マルサスの周知の所論、すなわち、子どもを養育する経済的能力を欠いて結婚することは無分別であり、非難されるべきであるという主張を批判しているということである。以下、ワーズワースの作品に即してその所論について簡潔に吟味するとしよう。

……、お互いが傷つけ合って、  
すべての健全な成長をはばむような  
故郷の土地に群がる、集団の恐怖よ、  
なくなるがよい。むしろ人口増加の法則と  
神からの命令を喜びなさい。  
——そして貴方は喜ぶ特別の理由があるの

です。

——というのは、風が荷物を背負った  
勤勉な蜂に、移動を容易にさせるからです。  
そして群がる巣箱からぶんぶん音をたてて  
飛行し、新しい住家で好きなところに定住し、  
新しく仕事を始めるように定められた蜂たち  
に、好都合な道を用意するように、  
そのように英国の力と意志と本能と定められた  
必要性のために、開かれた広大な海が、  
自分の仲間を捨てるように誘い、  
次から次へと出発させ、希望や  
大胆な冒険に好都合な面を持つ  
あらゆる沿岸に、必ず新しい共同体（new  
communities）を確立するように仕向け、技  
術や忍耐に対し彼らの当然の報酬を約束する  
からです<sup>15</sup>。

ワーズワースの詩集『逍遙』の第九巻からここに引いた詩は、対話形式で書かれ、語りかけるように展開されているので、ある意味において分かりやすいといえるが、ロマン主義詩人特有の想像力により隠喩などが駆使されているので、難解なくだりも散見される。ワーズワースは「一八一四年版への序文」において、この詩は「人間、自然、社会への考え方を含む哲学詩」であるとのべており（一方では、理論を開陳したものではないという）、ここに盛り込まれている隠喩などは当時のイギリスの政治・経済情勢に通暁していないと容易に理解することができないと思われる。ともあれ、ここで掲出詩を簡潔に解説すれば、次のようになる。

<sup>14</sup> D.Winch, *Riches and Poverty: An Intellectual History of Political Economy in Britain, 1750-1834*, Cambridge University Press, 1996, pp.318-319.

<sup>15</sup> W.Wordsworth, *The Excursion*, 1814. In Wordsworth's Poems in 3 Volumes, Vol.3, Edited with an Introduction by P.Wayne, J.M.Dent, 1955, p.370. 田中宏訳『逍遙』成美堂、1989、510-511ページ。

冒頭の「集団の恐怖」というのは、原注から推して、当時マルサスの『人口論』が巷間において多くの読者を獲得していた——したがって、多くの信奉者が存在していた——という状況を指示している。そして、この状況を「恐怖」と形容しているところに、反マルサス主義者としてのワーズワースの立場が明瞭に表出しているといえよう。それが「恐怖」であるのは、「お互いが傷つけ合って、すべての健全な成長をはばむ」からである。その故にワーズワースは、それは「なくなるがよい」と、自らの希求するところを表白するとともに、マルサスの主張とは逆に、いわゆる「人口増加の法則」は神からの「命令」として喜ばべしと高唱するのである（前述のポウモント夫人の手紙への返信が想起される）。

さらに、ワーズワースは歩をすすめて、労働者を「勤勉な蜂」に擬しつつ、その「蜂」が自由に振る舞う環境が整えられた暁には、希望に満ちた「新しい共同体」が展望されるという（ここでは「技術や忍耐」対して「当然の報酬」が約束されているとされ、技術の重要性が暗示されているといえよう）。なお、「新しい住家で好きな所に定住し」とあるのは明らかに、当時もなお存続していた「居住地法」（1662年成立）の軛からの解放を意味しているとみなすことができよう。なお、この「居住地法」の評価については留意が必要であるが<sup>16</sup>、いずれにせよ、ここで「勤勉な蜂」が「ぶんぶん音をたてて、飛行する」ように、労働者が自由に移動し定住

することを妨げているとされているのは当を得ているといえよう。

ここでワーズワースの詠むところを註解しつつ整理すれば、次のようになる。「人口の増大」のもとで、圧制ではなく、「勤勉な蜂」が「ぶんぶん飛び回る」というような自由があれば、労働者は自らの自由な「力」と「意志」とを働かせて、「本能と定められた必要性」を充足するために、地球の「広大な海」——雄大な自然ないし豊かな自然資源の暗喩とみることができのだが——を自由に移動することができる。こうして、いくつもの「新しい共同体」が形成されるであろう、と。わけてもワーズワースがここで強調していることは、「自由」である。フランス革命に共鳴したワーズワースにとって〔資本による〕圧制から「自由」であれば、広大な自然の懷に抱かれて生き生きといきていけるということであろう。そして、「当然の報酬」とあるように、人びとはこの「新しい共同体」にあって、「平等」であると黙示的に語られているようだ。このように評するのは、穿ちすぎであろうか。

いずれにせよ、われわれは、ここに詠われている「自由」や「平等」は、フランス革命の理念などとは異なる地平——労働の世界——において高唱されていることを看過してはならないであろう。付言すれば、ここにもみるワーズワースの思想と後のW.モリス（1834 - 1896）のそれとの共軛性も注目される<sup>17</sup>。さらにいえば、ワーズワースが「新しい共同体」を構想するば

<sup>16</sup> この「居住地法」とその評価については、小山路男『イギリス救貧法史論』日本評論新社、1962、147-155ページ参照。

<sup>17</sup> モリスのユートピア思想については、さしあたり次の拙稿を参照のこと（ワーズワースの思想との異同も明らかになる）。仲村「ロマン主義的ユートピア思想の一類型——ウィリアム・モリス——」『法学論集』（鹿児島大学法学会）第37巻1・2合併号、2003.6.



あい、ルソーのいう自然人や自然状態が念頭にあるように思われる。フランス革命に共鳴したイギリスの知識人たちは概ね、ルソーの信奉者であったのである。だが、ワーズワースは決して「後ろ向き」のユートピアンであったわけではない。ワーズワースは「新しい共同体」へと向かう「変化」のなかで、「しまいには寂しげな大波にた、かれる最も住むに適しない岩でも、文明化された社会の歌を聞くでしょう。そしてその香りが漂う文明化された技術の花を咲かすでしょう」<sup>18</sup>と謳いあげている。こうしてみると、少なくとも『逍遙』における詩想をみる限り、ワーズワースはいわゆる「反技術」の立場にはたってはいないと言わなければならない。

“ユートピア”にほかならないこの「新しい共同体」は、マルサス主義者の過剰人口論への批判として構想されたものであるが、これを展望するについては、その直前の連において詠われているように、現状の変革が前提とされているのである。ひとつは、「不満」や「騒々しい暴動」を生みだす「無知」が取り除かれるということである。因みに、ここでいう「騒々しい暴動」とは、当時困窮を極めていた農民の大規模な暴動を指示しているとみてよいが、その原因が「無知」であるかのように詠まれている点については留意が必要である。ワーズワースはこの「無知」にかかわって、「すべての人々が教えられ、訓練されることを必要とします」と詠っていることに指目するとよい。その背景には、「無知」にならざるをえない人びとの惨状

があるのである。この惨状についてワーズワースは、『逍遙』の第八巻においてかなりのスペースを割いて詠んでいる。その一部を抜いて、次に掲出するとしよう。

経済学者たちはその [子供たちの] 遊ぶ権利の喪失によって、国家は栄えると貴方に言うでしょう。

——それは残酷な考えであり、  
途方もない誤算です。母親は彼女の罪もない息子たちの破滅によって、繁栄できるでしょうか。

息子たちにとり小さい時から働かざるを得ない必要性が、自然らしさを妨げ、理性を消耗し、感情を枯渇させ、

幼児の存在自身を閉じ込め、  
春そのものも衰退の季節としています。  
たとえやつれる思いの不平や、変化への渴望が  
はびころうが、あるいは習慣が意気消沈し、  
落胆した魂を押さえつけて、厳しい仕事と、  
長い束縛を愛するまでになっても、運命は  
じめで、その境遇は悲しいものです<sup>19</sup>。

ワーズワースはここで、働かざるをえない境遇に追いこまれた子供たちの過酷な労働が彼らの理性を消耗させ、感情を枯渇させている状況<sup>20</sup>を活写している。そして、こうした境涯において、子どもたちの知性や徳性が奪われていくことを暗示している。かかる状況は、ワーズワースによれば、「大きな変化の暗黒面」にほかならるのであるが、その「大きな変化」は

<sup>18</sup> *The Excursion*, op.cit., p.370. 田中宏訳, 512ページ。

<sup>19</sup> *The Excursion*, op.cit., p.344. 田中宏訳, 470ページ。

<sup>20</sup> また、「……無知としばしば欲望と、哀れな飢餓の奴隷であった田舎の少年……」という描写もみられる (*Ibid.*, p. 365. 田中宏訳, 499ページ)。

「社会的産業の支配下」において起きているのである<sup>21</sup>。その「大きな変化」として、都市と農村の変貌、土地収奪等々、様々な「変化」があげられているが、ワーズワースは労働の現場にも目を注ぐ。その一例として、「男たち、乙女たち、若者たち、母親、幼ない少年少女たちが、この神殿 [工場] に入り、めいめいいつもの仕事を始めます。この神殿ではこの大国の最上の偶像である利得に対し、絶えず生贄が捧げられます<sup>22</sup>」というくだりがみいだされる（先の自由な労働との対照性が鮮やかである）。

ワーズワースはマルクスと同様に、児童労働および婦人労働に括目する。ワーズワースは一貫して子供たちの悲惨な実態に目を向け、同情の念を抱いてきたということが改めて想起されるのであるが、ここではさらに、「利得」とこれへの「生贄」という関係性が描かれており、素朴な搾取論がみられる。ワーズワースはサウジーとともに、貧困もさることながら、マルサスが非難してやまない、労働者の「無知」や「無分別」などは社会的圧制によるものであることを明らかにするのである<sup>23</sup>。かくして、こうした社会認識から当然のこととして、「雇用をみいだせない人びとや、健康で壮健な身体を維持するに足る賃金を得ることができない人びとはすべて、法律により扶養される権利がある」という主張<sup>24</sup>が導きだされるにいたるのである。このワーズワースの生存権擁護の思想は、マルサスの自己責任論への明確な批判であるといわなければならない。この批判は、貧者を“どう養うか”ではなく、“どう切り捨てるか”に血

眼になっているマルサス主義への痛打である（なお、当時労働者階級自身も明確に、救済の権利を主張していたという事実を見落としてはならない）。

この“どう養うか”に関連して、ワーズワースは児童の“学習権”——生存権の主要な一部をなすとみなしうるのだが——について、次のように詠んでいる。

あゝ、知識を最も崇高な富、  
最上の保護者として重んじ、この帝国が  
その忠誠を求めながら、自らの側でも、  
この王国に仕え、また従うために  
生まれる人びとを教える義務を認め、  
またこの国が養うすべての子どもたちのために、  
学問の基本を教えることを保証し、また、  
その精神に道徳的及び宗教的真理を  
理解させ実行させるように伝えることを、  
法令によって自らに課しその結果、  
たとえどのように貧窮しても、適切な  
教養にささえられずに、意気消沈し、あるいは、  
収拾のつかない無秩序に走ったり、  
あるいはやむを得ず知的な器具や道具の助け  
もなしに、  
洗練された人々の間で、無作法な人びとの群  
れとして、  
または自由な貴族たちの間で奴隷の群れとし  
て、  
退屈な日々をあくせくと働かざるを得ない  
ことのないような、輝かしい時が来ますように<sup>25</sup>。

<sup>21</sup> *Ibid.*, p.350ff. 田中宏訳, 460ページ以下。

<sup>22</sup> *Ibid.*, p.352. 田中宏訳, 464ページ。

<sup>23</sup> H.A.Boner, *Hungry Generations*, op.cit., p.75.

<sup>24</sup> F.M.Toddo, *Poetics and the Poet: A Study of Wordsworth*, Methuen & Co, 1957, pp.207-208.

<sup>25</sup> *The Excursion*, op.cit., p.368. 田中宏訳, 506-507ページ。

みられるとおり、ワーズワースは「知識」こそもっとも「崇高な富」であるとする見地から、いわゆる“学習権”を提唱している。ここには、「学問」「教養」「真理」といった言葉が鑲められているのだが、ワーズワースがこうした提唱をなすについては、前述の、惨めな児童労働が念頭に置かれているのであり、別の連においては端的に、「……価値を所有する所から生じる義務と、差し迫った悪を避けるのに必要な用心深い慎重さは、等しくすべての人々が教えられ、訓練されることを必要とします」<sup>26</sup>と詠われている。そして、ワーズワースはこの「権利」を「平等の権利」であると主張するとともに、随所で「神聖な権利」であると呼んでいる。ここにもまた黙示的にマルサスの思想への批判が表白されているといえよう。

こうしてみると、ひとたびフランス革命に「失望した」とみなされたワーズワース<sup>27</sup>も、そうではなく、ゴドウィンの信奉者にふさわしく、持続する意思＝思想をもちつづけていることがわかる。これこそまさしく、“文明社会の人間性”の一典型であり、マルサスとの対照性が鮮やかである。その故に、マルサス批判の水脈においても光彩を放っているのである。

(3)

マルサスは失業している貧者の食べる権利 (right to eat) を否定する。しかし、かれは働いていない富者にはこの権利を認める。……彼はいう、もしも他の人がその人に何らかの事に雇用することができないか、あるいは雇用する意思がないならば、その人は生きる権利 (right to exist) をもたない、と。かれによれば、これは自然の法 (law of nature) である。——われわれの法はこの法を覆したいとおもうのだが。さらに彼はわれわれに語る。この自然の法は神の法 (law of God) である、と。……自然はある人間が他の人間のために労働すべきであると命じなかった。自然はすべてのものを共用 [共有] のものとしたのである<sup>28</sup>。

この一節は、産児制限運動の先駆者とみなされるフランシス・ブレイス<sup>29</sup>の主著『人口の原理に関する例証と証明』(1822. 以下、『例証と証明』と略す) から引いたものである。ブレイスはここで生存権にかかわるマルサスの周知の叙述を要約しつつ、その思想を厳しく批判している。ブレイスにあっては、自然の法はマルサスとは逆に、人間の平等な生存権を認めているのだ。この見地は明らかに、われわれが検討済みのゴドウィンやペインの思想に連なるといえるが、いずれにせよ、ブレイスがここに主張するところは、われわれの文脈において重要な意義を有する。以下、われわれの文脈におけるプレ

<sup>26</sup> *Ibid.*, p.369. 同前, 510ページ。

<sup>27</sup> この点については、本稿のシリーズ(2), 75ページ参照。

<sup>28</sup> F.Place, *Illustrations and Proofs of the Principle of Population*, 1822. Reprinted 1967 by Augustus M. Kelley. pp.137-138. (以下, *Illustrations and Proofs of the Principle of Population*と略す。)

<sup>29</sup> 産児制限の必要性を最初に示唆したのはJ.ミルであるとするのが通説であるが、これを明示的に主張したのはブレイスである。産児制限運動におけるブレイスの位置と役割、挫折等——D.リカードやJ.S.ミルらとの交流を含めて——については、さしあたり次の著作を参照のこと。J.A.Field, *Essays on Population and other Papers, Together with Material from his Notes and Lectures*, Compiled and Edited by Helen F. Fisher Hohman, The University of Chicago Press, 1931, pp.91-110, p.249ff. / D.Miles, *Francis Place; The Life of a Remarkable Radical 1771-1854*, The Harvest Press, 1988, p.139ff. / 吉田秀夫『新マルサス主義研究』大同書院, 1940. なお、ブレイスの産児制限運動の評価は今日的視点から改めて検討される必要がある。

イスの「思想」を少しばかり吟味するでしょう。

ブレイスは『例証と証明』の1年前に論稿「マルサスとゴドウィンの諸理論について」(1821)を著わしている。この「理論」は書名から明らかなように、当時論争の渦中にあったマルサスとゴドウィンの人口に関する“理論”を検討し、独自の見解を提示したものである。ブレイスはまず、マルサスとゴドウィンの“論争”の起源と推移、さらには現状について記述することから始める。ブレイスは一方において、マルサスがゴドウィンの「平等な財産」の原理は空疎であるとして、“平等社会”を批判していることについては、「これまでのところ」疑いなくマルサスが“勝利”しているという<sup>30</sup>。「これまでのところ」と留保しつつ、他方においてブレイスは、マルサスが彼の「人口の原理」をア・プリオリに適用しつつゴドウィンの“平等社会”を批判していることについては、これを誤謬であると指摘する。なぜならば、人間は動物とは異なり、自らの諸々の資質(情欲など)を変えることができるのであるが、マルサスはこれを不変のもののみとしているからである。だが、人間性が変容するならば、“平等社会”においても、「人口の原理」は違ったものになるとブレイスはいう<sup>31</sup>。こうした所論は“平等社会”における情欲の減退を説くゴドウィンの所説に黙示的に与しているといえよう。こうした立論——人間の資質は変えることができるという主張——は、マルサスの人口増殖論を批判するばあい、赤い糸として貫いているのである。

ブレイスはのべる。「ゴドウィンの新著『人口について』(Of Population, 1820)の目的は、マルサスの基本的命題、とりわけ、人類は生存手段をこえて増加する傾向をもつという命題は正しくないということを示すことにあった。そしてそれを誤りであるとみなしている点にわれわれは完全に同意する」<sup>32</sup>と。そして、ゴドウィンのマルサス批判を完全に受容するとともに、次のようにマルサスを批判する。「彼は決まって、“人口の原理”を人民の数の増加の原因として語り、それは人民を増加させる原因だけでなく、勤勉(industry)を増大させる原因でもあることに注目しない。」<sup>33</sup>ブレイスによれば、人は結婚をすると、より道徳的になり、より勤勉(laborious)になり、さらに自制的になるのである。

ここにみるようにブレイスは、“人口の原理”をつねに歴史的な「変化(alteration)」のなかに——つまり、歴史的に——捉えようとしているのであるが、見落とせないのは「勤勉」というキーワードである。この「勤勉」は人間の主体的・能動的活動を含意するのみでなく、「文明化」の動因にほかならないからである。ブレイスはいう。文明開化した社会においては、野心をもち、文芸を楽しみ、商業を営み、快楽を求めるといふ生活は、「父になりたいという欲求」を消滅させるのであり、こうして、この社会にあっては人口の増加は「人口の原理」の「力」の減少によって「生存手段の制限内に維持される」ことになる、<sup>34</sup>と。

<sup>30</sup> F.Place, “On the Theories of Malthus and Godwin.” *New Monthly Magazine and Literary Journal*, vol.1, 1821, pp.196-197.

<sup>31</sup> Loc.cit.

<sup>32</sup> Ibid., p.198.

<sup>33</sup> Ibid., p.203.

<sup>34</sup> Ibid., pp.203-204.

一瞥して明らかなように、ここでの展開は労働者階級ではなく、中間階級についてのべられたものとみることができる。したがって、大きく制約されたものであるといわなければならないが、その限りにおいて、歴史的に証明されているといえよう。いずれにせよ、この展開はゴドウィンの人間把握とも通底するということが改めて留意する必要がある。そして、次の点が指摘されるべきである。

ひとつには、人口の増加率と生存手段（食糧）の増加率の乖離に関するマルサス批判は概して、歴史的な事実を提示してその誤謬を指摘するものや、生産力の増大による生存手段生産の増加、さらには、広大な未耕地の存在を主張する見解などであるが、プレイスはゴドウィンとともに、人間主体の変化にも着目して人口の抑止を説くという点において特徴的である。もちろん、ゴドウィンは前述のように、科学の発達などの客観的過程（さらには、未耕地の存在）にも注目する。だが、この科学の発達もまた、人間の主体的能力の発達の帰結するところである（ただし、情欲の減退などは次元を異にする問題であることはいうまでもないことである。）

さらに付言すれば、プレイスはマルサスの「人口の原理」を全的には否定していないということである。この点は看過できない。プレイスによれば、人口の増殖はいくつもの“原理”によって決定されるのであって、マルサスのいう“人口の原理”は「それらの原理のうちのひとつ」であるという<sup>35</sup>。そうであるとすれば、マルサスの“人口の原理”は限定的に肯定されたことになる。

こうしてみると、少なくとも論稿「諸理

論」においては、マルサスに厳しい批判の矢を放ち、概ねゴドウィンに与しているといえる。このことを確認して、われわれは次に『例証と証明』における論述に目を転じるとしよう。

プレイスは『例証と証明』においても、マルサスとゴドウィンの“論争”を論評する。ここではマルサス批判よりもゴドウィン批判の方が目立っている。だが、留意すべきは、マルサス批判を試みたゴドウィンの“*Of Population*”は大別して、人口増殖の命題に関する部分と生存権にかかわる部分とからなるということである。このうち前者はすでに触れたように、明らかに失敗しているといわなければならないが、後者の批判は正鵠を射ているというのが拙論の立場である。

前者に関していえば、そもそもマルサスの命題自体が恣意的であり、検証に耐えないものであるにもかかわらず、敢えてこれを俎上にのせること自体が無意味だったのであり、その結果、墓穴を掘ることとなるのも自然の成り行きであったといえよう。したがって、それは当然のこととして、プレイスの批判を免れることはできなかったのである。だが、プレイス自身、論稿「諸理論」においてマルサスの人口増殖論に反対しながらも、『例証と証明』においては、逆にこれを支持するにいたる。この逆転は不思議であり、謎めいているが、深い親交を結んでいたD.リカードやJ.S.ミルらの影響——ある意味において、経済理論（賃金基金説）への屈服——、あるいは産児制限論との整合性を図る必要性などが背景にあると考えられる。ともあれ、これ以上の詮索はさしあたり控えたい。

他方、マルサス人口論の核心のひとつをなし

<sup>35</sup> Ibid., p.204.

ている生存権をめぐる問題は、ゴドウィンのマルサス批判のばあいと同様に、プレイスにあって重要な課題であったのである。こうした観点からわれわれは、プレイスのマルサス批判の根幹をなす、生存権をめぐる問題について吟味するとしよう。本項の冒頭に掲出した一節は、そのため素材である。この問題を検討するにあたっては、なによりも「思想」が問われることになる。

われわれはこの掲出文を一読して直ちに、ここにみるプレイスの思想とゴドウィンのそれとの共軌性に思い当たるであろう。前述のように、ゴドウィンは自然の法=神の法を根拠として生存権を否定するマルサスを厳しく批判するとともに、「公正不偏の原理からして、世界の財産は共同の蓄積物であり、そこから欲しいものを引き出すについては、ひとりひとりが同じ正当な資格をもつ……」（再引用）とのべている。この一文は、プレイスから引いた掲出文のなかの「自然はある人間が他の人間のために労働すべきであるとは命じなかった。自然はすべてのものを共有としたのである」というくだりと殆ど相似であるといっても差し支えないであろう。プレイスはここにおいても、ゴドウィンの思想を踏襲しているのである。

そして、看過できないのは、プレイスの理解するところでは「失業している貧者」の「食べる権利」=生存権の否定と「働いていない富者」の「食べる権利」の容認とがコインの表裏をな

しているということである（ここにはマルサスの階級的立場が暗示されている<sup>36</sup>）。プレイスは、貧困の問題を貧者と富者との関係性において捉えているのであるが、それはなお権利という抽象的なレベルにおいてである。一方、同時代人のP.ラヴェンストーンはより具体的に——ラディカルに——踏み込んで、次のようにのべている。「労働者の利益は彼の労働に依存して〔労働を搾取して〕生活している人びとの犠牲になってきた。こうした自然の全秩序の転倒から、現代社会を悩ましているすべての害悪が生まれてきたのである。勤勉な人が欠乏に陥る羽目になる。なぜならば、勤勉な人の労働に与る、仕事をしていない者の数が多すぎるからである。また、人口が生存手段を超えるようにみえるのも、生産に従事する人々の割合が社会のなかで少なすぎたからである。労働者の稼ぎが労働者の生計には不足しているのも、持てる者の要求するところが前もって満たされるからであり、ほとんど全部を吸い取るからである。」<sup>37</sup>

みられるとおり、ラヴェンストーンは現実の歴史的過程に即して、労働者の労働および労働の果実の取得をめぐる関係性のなかから問題の本質を剔抉している。つまり、搾取関係とこれに随伴する不生産的労働の存在という歴史的現実のなかから、生存手段にたいする「過剰な人口」が生成することを析出し、それが人口と生存手段との絶対的不均衡として現象することを示唆している。こうした理論的な把握は前述の

<sup>36</sup> マルサスの階級的立場は改めて指摘するまでもなく、地主階級および資本家階級の利益——資本・賃労働関係の進展とともに変化するのであるが——を代弁することにあつた。プレイスらの通俗的な表現によれば、「貧者 (the poor)」の対概念である「富者 (the rich)」あるいは「下層階級 (the lower class)」の対概念である「上流階級 (the upper class)」の利益を代弁したのである。

<sup>37</sup> P. Ravenstone, *A few Doubts; As to the Correctness of some Opinions generally entertained on the Subjects of Population and Political Economy*, 1821. Reprint of Economic Classics, Augustus M. Kelley, 1966, p.204.

ゴドウィンに連なるとともに、マルクスの人口論にも近接しているといえば、いい過ぎだろうか。

いずれにせよ、プレイスもまたアプローチの仕方は異なるとはいえ、明解な権利論を定立しつつ、ラヴェンストーンと同じ地平からマルサス批判を敢行しているのである。プレイスは上の一節につづけて念入りに、次のようにのべる。「貧者が彼の労働によって食糧を買うことができないとき、彼の生存手段にたいする権利を否定することは、不条理であるだけでなく、まったく有害である。そうしたどぎつい風潮は、富者の貧者に対する心情をますます冷酷なものとするであろうし、また、マルサス自身も同じ責めをおわされることになるう」。<sup>38</sup>

こうした「冷酷な」立論がなされるについては、マルサス固有の労働者観——人間観と置き換えてもよいのだが——があるとプレイスはみる。プレイスによれば、マルサスが働く人民の状態について語るとき往々にして、自然（自然の法）や神（神の法）などを持ち出すが、自分[プレイス]がよく耳にするのは、彼らに対する富者や権力者の抑圧である。そして、プレイスはその証拠として、国会議員の選挙からの排除、生活必需品への重い税、外国への移住の禁止、低い賃金、その他の事例を列挙して論難する<sup>39</sup>。

また、労働者の“怠惰”や“無分別”を言いたて、自己責任を説くマルサスに対して、それ

は労働者の実態を知らない者の言説にほかならないと反駁する。確かに、怠慢な労働者もいれば、放縦な労働者もいるが、それは少数であると主張する（だが、E.J.ホブスボームは、「……この新しい都市の工業化された貧民の道徳的退廃を嘆いた同時代の人たちは、誇張しているのではなかった」とのべているのだが<sup>40</sup>）。マルサスの社会的地位からして、労働者の状態を正しく判断することはできないし、労働の現場をみることもなく、労働者のマナーや遠慮のない会話に接することもない。これに対して、自分[プレイス]は労働者の喜怒哀楽を知っているといい、彼らに対する同情の念は消えることはないという自らの心情を吐露している<sup>41</sup>。

この辺りの叙述を追っていくとき、われわれは紙背から否応なしに、プレイスの怒りの感情を感じせざるをえないのであるが、こうした感情は恐らく、自らの労働者としての経歴（体験）に裏打ちされたものであろう。プレイスが「マルサスは労働者の敵であり、常に低賃金の主張者である」とするゴドウィンの論難を肯定的に引用している<sup>42</sup>のも、こうした文脈において捉えることができる。また、貧困の原因は富の不平等な分配ではなく、貧者の“無分別”にほかならないとするマルサスに対するプレイスの批判<sup>43</sup>も同様であるが、さらには、人間の資質——もちろん、労働者の資質もまた——は変化するという、マルサスとは異なる主張（可変論）の伏線がここに敷かれているということもでき

<sup>38</sup> F.Place, *Illustrations and Proofs of the Principle of Population*, op.cit., p.138.

<sup>39</sup> *Ibid.*, pp.151-153.

<sup>40</sup> E.J. Hobsbawm, *The Age of Revolution: Europe 1789-1848*, Abacus, 1978, P.248. 安川悦子・水田洋訳『市民革命と産業革命——二重革命の時代——』岩波書店, 1968, 330ページ。

<sup>41</sup> F.Place, *Illustrations and Proofs of the Principle of Population*, op.cit., pp.154-156.

<sup>42</sup> *Ibid.*, p.161.

<sup>43</sup> H.A.Boner, *Hungry Generations*, op.cit., p.101.

る。いずれにせよ、プレイスの労働者階級への同情と信頼は厚く<sup>44</sup>、したがって、労働者階級の知的能力や道徳性の向上とを信じており、教育の重要性を認識していた。もちろん、教育の重要性は資本家階級をも含めて、多くの人々の主張するところであった。そもそも資本による労働の包摂の進展——資本・賃労働関係の発展——は労働者階級の陶冶という課題に直面していたのである。より広い視点からいえば、いわゆる「資本の文明化作用」は労働者の“洗練”を帰結するということである。

ともあれ、プレイスは徹頭徹尾、労働者を擁護しながらマルサスの生存権否定を批判——「論難」と表すべきか——しており、前掲の一節はそれを簡潔に表白したものであるといえよう。前述のように、ここにはゴドウィンが黙示的に表出しており、プレイスは明らかにゴドウィンの思想を継承しているのである。このことは「諸理論」と『例証と証明』とをとおして首尾一貫している。もちろん、ゴドウィンにおける難点についての批判も随所にみだされるのであるが、ゴドウィンの思想の根幹は継承していることは、上にみてきたとおりである。

ここで少しばかり整理すると、プレイスはゴドウィンによるマルサス批判のうち人口の増殖原理について、「諸原理」においてはこの命題

を拒絶し、『例証と証明』にあってはこれを受容している。だが、〈過剰人口と貧困〉というモチーフについていえば、プレイスのマルサス批判は首尾一貫しているといえよう。

こうしてみると、D.ウィンチのように、プレイスの『例証と証明』は「[マルサスの]人口の原理を支持することによって、マルサスとゴドウィンの間を調停するひとつの試みある」と評定する<sup>45</sup>のは当を得ているとは言い難い。こうした把握は恐らくN.E.ハイムの所説を踏襲したものと思われる。ここで「調停」というばあい、ウィンチにあっては、この書は、結婚を遅らせること〔道徳的抑制〕と救貧法の廃止というマルサスの解決策に代えて、結婚してからの避妊〔産児制限〕を提起しているという点を指示しているのである。<sup>46</sup>確かに、プレイスは産児制限を提唱するにあたり、マルサスの道徳的抑制を批判しているが、この批判は独自の意義<sup>47</sup>を有するのであって、この議論を両者の「調停」とみなす見解は正鵠を誤っているといえよう。

これに対して、ハイムは次のようにのべる。プレイスがゴドウィンとマルサスの間の「対立の調停」を引き受けた理由の一部は彼の人生体験によるものであり、一部は理論的な熟慮の結果、マルサスの改良なるものはまったく解決策

<sup>44</sup> 序に言えば、このことは、救貧法や産児制限めぐる労働者との対立・軋轢とは別の問題であろう。なお、次のような見解もある。併せて参照のこと。プレイスは貧者に対して「あまりに好い顔をされています」とするリカードの批判があるが、「救貧法をめぐるマルサスとプレイスの態度の相違については、前提となっている労働者像の相違が手法の相違となって現れたと言うべきである。プレイスの抱いていた労働者像は自らの経験にしばられていたと言ってよいかもしれない。」（柳沢哲哉「フランシス・プレイスにおける人口原理」『社会科学論集』[埼玉大学] 第118号, 2006.7, 39ページ）

<sup>45</sup> D.Winch, *Riches and Poverty*, op.cit., p.282.

<sup>46</sup> 同様の見解は、吉田秀夫『新マルサス主義の研究』（前出）においてもみいだされる（93-102ページ）。

<sup>47</sup> プレイスによるマルサスの道徳的抑制論批判の基底には、本稿においても重要視している、両者の労働者観の相違があるのであって——したがって、道徳的抑制批判はプレイスのマルサス批判の重要な論点のひとつであるというべきであり——、この道徳的抑制と産児制限とを「調停」の問題に収斂させて論ずるべきではないというのが拙論の立場である。



になっていないとはっきり理解したからである<sup>48</sup>と。ここでいう「彼の人生体験」はプレイスの労働者としての体験や、労働運動への参画、15人の子どもをもうけたという家庭生活などを含意していると思われるが、このくぐりなどはなお抽象的である。

ハイムは続けて、「マルサス主義は少なくともいくつかの細部については、1822年の時点において、なお未解決の問題である。……彼はマルサス・ゴドウィン論争に誤った二分法を看取して、両者に真実をみだし、その中間に位置するほうが無難であると考えたのである。付言すれば、ゴドウィンの人口についての考え方が労働者階級に影響を及ぼすことを恐れたのである」<sup>49</sup>とのべる。だが、われわれはこの言説を俄かには首肯することはできない。プレイスはゴドウィンとマルサスの「中間」にあるのではなく、増殖原理についてはマルサスに与し（ただし、前述のように、拒絶から受容へと転換するのだが）、労働者の生存権（および、これに連結する救貧法）についてはゴドウィンの思想を継承して、マルサスを徹底的に批判するというように、ある意味において「二面的」であったということである。決して両者の「調整」の役割を演じたのでもなければ、その「中間」に位置していたのでもない。なお、「ゴドウィンの人口についての考え方が労働者階級に影響を及ぼすことを恐れたのである」とする断定については、さしあたり留保したい。

ともあれ、こうした評定がなされるのも、ハイムにあっては〈過剰人口と貧困〉という核心的なモチーフがまったく無視されているからで

ある。同様の無視は、意識的であれ無意識的であれ、多くの論者に共通しているのだが、もしもこのモチーフに指目するならば、まったく異なる結論が導出されることになる。

以上われわれは、〈過剰人口と貧困〉というモチーフに即して、同時代人である文学者（作家=ディケンズ、詩人=ワーズワース）および新マルサス主義に連なるプレイスの思想を中心にみてきた。そして、そこにみいだされたのは、いずれにあっても——明示的であれ、黙示的であれ——、ゴドウィンの思想が赤い糸として基底に貫いているということであった。その故にこそ、それらはマルクス・エンゲルスの思想へと連なる水脈において、大きな位置を占めることができるのである。このことは、次のようなエンゲルスの記述によって引証することができよう。エンゲルスは「イギリスのプロレタリアートが、自主的な教養を習得するのに、どんなにすばらしい成功をおさめているかは、ことに、比較的新しい哲学や政治学や詩のうちの、画期的な作品が、殆ど労働者だけに読まれている、という事実を見ればわかるのである」としたうえで、「最近の二人の偉大な実際のな哲学者であるベンサムとゴドウィン、とくにゴドウィンは、……プロレタリアートのほとんど独占的な財産である」<sup>50</sup>（下線は仲村）とのべている。

だが、マルサス人口論のもうひとつの論点をなす人口増殖論については、経済学からのアプローチが重要であった。マルサスも客観的過程の進展——資本蓄積の進展、資本・賃労働関係および労働市場の「成熟」など——に対応して、人口論から経済学へ立論の仕方をシフトさせて

<sup>48</sup> N.E.Hime, "Editor's Introduction", in F.Place, *Illustrations and Proofs of the Principle of Population*, op.cit., p.35.

<sup>49</sup> Loc.cit.

<sup>50</sup> F.エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』（『全集』第2巻）475ページ。

いる。プレイス自身も人口論における経済学の重要性を強調し、『例証と証明』の末尾において皮肉を込めて、ゴドウィンにおける経済学の欠如を指摘する。そして、その末尾を次のように結んでいる。「……ゴドウィンが経済学の諸原理を正しく教えられるならば、彼がこれまでたいへん苦心して非難してきた学説のもっとも熱心な支持者のひとりとなるだけでなく、もっとも有益な支持者となるであろう」<sup>51</sup>と。

しかしながら、プレイスの「経済学」なるものもD.リカードやJ.S.ミルに屈服した（賃金基金説の信奉）という程度のものであった。結局のところ、経済理論（経済学）にもとづく、根底的なマルサス批判はマルクス（およびエンゲルス）の“経済学批判”を俟たなければならなかったのである。

（4）

プロレタリアートにたいするブルジョアジーのもっともあからさまな宣戦布告は、マルサスの人口理論と、そこから生まれた新救貧法である。……[マルサスの理論の]おもな結論を簡単にくりかえしておくと、この世はつねに人口過剰であり、だからつねに窮乏、困窮、貧困および不道徳が支配するほかないこと、またあまりに人の数が多すぎ、したがって

種々の階級に分かれて生存するのが人類の運命であり、永遠の宿命であって、これらの階級のうちある階級は多かれ少なかれ富み、教養があり、道徳的であるが、他の階級は多かれ貧しく、悲惨で、無知で、不道徳である、ということである。そこで、このことから、実践のうえではつぎのような結論がでてくる——しかもこの結論はマルサス自身がひきだしているのだ——、慈善行為や救貧基金はもともと無意味である。というのは、これらのものは、その競争が他の人たちの賃金を圧迫するはたらきをしている当の過剰人口を維持し、その増加を刺激する役にしかたないからである<sup>52</sup>（下線は仲村）。

後にみるように、マルクスは『資本論』において、資本の蓄積過程における過剰人口の動態を分析しているが、その展開はある意味において、マルサス人口論への批判でもあるということもできよう。ただし、『資本論』の当該箇所においては、直截にマルサス人口論を俎上にのせてはいない。脚注において触れている<sup>53</sup>にすぎない。それもマルサス人口論の内容に即して批判するのではなく、当時の情勢——フランス革命への反動——にける役割など、主要にはその階級的な性格を剔抉しているにすぎない。

だが、マルクスは『資本論』に先立って、救貧法批判との関連において過剰人口問題に言及しており<sup>54</sup>、また後にふれるように、<sup>1857</sup> -

<sup>51</sup> F.Place, *Illustrations and Proofs of the Principle of Population*, op.cit., pp.270-271. 実際にはゴドウィンもまた、経済学に対して関心を寄せていたのだが、管見によれば、具体的には論及していない。

<sup>52</sup> F.エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』（前出）、519ページ。

<sup>53</sup> 次のようにのべている。「……このマルサスの著書『人口論』は、……自分で考えた命題はなに一つ含んでいないということである。このパンフレットが大きなセンセーションをまき起こしたのは、ただ党派の利害だけによることだった。フランス革命はイギリス王国で熱烈な擁護者を見出しつつあった。一八世紀に徐々に作りあげられ、次いで大きな社会的危機のまっさいちゅうに……ききめの確かな解毒剤として鳴り物入りで宣伝された『人口原理』は、イギリスの寡頭政府によって、人間の進歩を求めるいっさいの熱病のすばらしい撲滅剤として歓迎された。自分の成功にびっくりしたマルサスは、今度は、ぞんざいに寄せ集めた材料を古い図式に詰め込んで、新しい、といっても自分が発見したのではなくただ横取りしただけの材料をつけ加えることに、取りかかった。」（K.マルクス『資本論』大月書店版、1967、804-805ページ）。さらに、マルクスは続けて——「ついでに」といいながら——、マルサスが牧師であることから、プロテスタント神学の「人口論」を厳しく批判している。この部分も人口問題を考えるにうえて、たいへん示唆に富んでいる。

<sup>54</sup> K.マルクス「論文『プロイセン国王と社会改革——プロイセン人（『フォルヴェルツ！』第60号）にたいする批判的論評』（前出）435ページ参照。

58年草稿』において、マルサスの絶対的過剰人口論を完膚なきまでに批判しているのである。さらに、『資本論』においては、労働日の延長を主張するマルサスを批判するなかで——相対的過剰人口論との関連ではなく——、次のようにのべている。「……機械の異常な発達や婦人・児童労働の搾取と同時に労働日の無限度な延長が、……労働階級の大部分を『過剰』にせざるをえなかった、ということを見ることができなかつたのである。この『過剰人口』を資本主義的生産のためのただ単に歴史的な自然法則から説明するよりも、自然の永久的法則から説明するほうが、もちろん、ずっと好都合でもあり、また、……支配階級の利益にもずっと適っていたのである。」<sup>55</sup> こうしてみると、マルサスの人口論はマルサス人口論への批判を前提として、そのうえに練り上げられたものであることがわかる。

しかしながら、この流れをみるばあい、エンゲルスがマルクスに先行してマルサス批判を展開していることに留意する必要がある。『イギリスにおける労働者階級の状態』（1845）から引いた前掲の一節もそのマルサス批判の一断片である。エンゲルスのこの一節は、プロレタリアートに対する「数多くの攻撃」について縷々のべた後に記述されたものである。そして、マルサスの人口論および新救貧法はブルジョアジーのプロレタリアートに対する「もっともあからさまな宣戦布告」であるとする、ひとつの結論を導き出しているのである。ここにみるような、マルサス人口論の階級の本質への鋭利な批判は、

先に引いた「支配階級の利益にもずっと適っている」とするマルクスの言説とも類似している。この二人は随所で同様の批判を試みているのである。

こうした文脈においてみるとすれば、前掲の一節は、マルサス人口論（および新救貧法）の内容を要領よく的確にまとめてはいるが、なお、不十分であるのもやむをえないことである。われわれはさしあたり、エンゲルスによるマルサス人口論批判の導入としてこの一節を掲出したのであるが、より詳しい批判は1年ほど前に著わされた『国民経済学批判大綱』において展開されている。

この書はマルクス経済学の「発端」として位置づけられる<sup>56</sup>だけでなく、そこに展開されているマルサス人口論批判はマルクスに少なからぬ影響を及ぼしているという点において、マルサス批判の水脈において、重要な文献である。もちろん、以下にみるように、この『国民経済学批判大綱』は理論的にはなお未成熟ではあるが、当時の社会・経済の実態をヴィヴィッドに捉えながらマルサスの理論と思想とを俎上にのせて、“自由主義経済学”への批判を試みている。われわれはこの書を一読して、若きエンゲルスの熱情溢れる筆致を看取することができよう。

ところで、エンゲルスはまず、当時の「国民経済学」は「完結した致富学」であるという見地からこれを俎上にのせる。エンゲルスによれば、この“自由主義経済学”は「私的所有の正当性をうたがってみようとは夢にもおもわなかつ

<sup>55</sup> K.マルクス『資本論』（前出）、685ページ。

<sup>56</sup> 杉原四郎『ミルとマルクス』（ミネルヴァ書房、1957）第1章参照。なお、エンゲルスの思想形成史における『国民経済学批判大綱』の意義については、中川弘『マルクス・エンゲルスの思想形成』（創風社、1997）、第6章および補章参照。

た」ので、「かつて存在したもののなかでもっとも粗野で野蛮な体系であり、人間愛とか世界市民とかいったあの美辞麗句をすべて打倒した絶望の体系」であるマルサスの人口理論を生み落としたという<sup>57</sup>。

エンゲルスはこのように、アイロニーを込めて筆を起しつつ論をすすめているが、このばあい、「……私的所有が存立しているかぎり、結局いっさいが競争に帰着する」<sup>58</sup> とする叙述にもみられるように、市場経済特有の競争というカテゴリーを軸にして展開しているという点において特徴的である。わけても市場に視点を据えているのである。ここに既に、ひとつの限界が内在しているのであるが、この点はさしあたり措くとして、エンゲルスによれば、競争の帰結するところは「繁栄と恐慌、過剰生産と停滞との交代」という「狂った状態」であるが、経済学者はこの状態を理解することができないが故に、それを「説明」するために、人口理論を「発明」したという。

こうした論述は飛躍していて理解しがたいのだが、読みすすんでいくと、次のような一節がみいだされる。「……資本は流動の真ただ中で凝結し、労働者には仕事がなく、国中は過剰な富と過剰な人口にくるしむ。ノ事態をこのように説明することを、経済学者は正しいものと認めることができない。でなかったなら、彼は、すでに述べたように、その競争学説全体を放棄しなければならないだろうし、自分が生産と消費を、過剰な人口と過剰な富を対立させている

ことの無意味さをさとらなければならないであろう。だが、事実を否認することはけっしてできないので、この事実を理論と一致させるために人口理論が発明されたのである。」<sup>59</sup>

エンゲルスは続けて、こうして「発明」されたマルサスの人口理論を次のようにまとめている。「人口はたえず生活手段を圧迫する。生産が高められるのと同じ割合で人口は増加する。そして意のままになる生活手段以上に増加しようとする人口特有の傾向が、あらゆる貧困、あらゆる罪の原因である。なぜなら、人間が多すぎる場合には、彼らは暴力的に殺されるか、それとも餓死するか、どちらかの方法で除去されなければならないからである。」<sup>60</sup> エンゲルスはこのように、マルサスの人口理論を整理してこれを「下劣で軽蔑すべき学説」であるとし、「経済学者の不道徳性はついに絶頂に達しめられている」と論難しながらも、他方において、マルサスの理論は、「まったく必要な通過点」であると評定している点は括目される。「通過点」であるということの含意は、主要には、「この理論のおかげで」、土地と人類のもつ生産力に注意が払われるようになっただけでなく、「社会改革」の必要性もまた認識されるようになったからである。

このうち生産力の増大についていえば、確かに、マルサス人口論を批判する論者たちの書を紐解いてみると、反証として生産力の増大による生存手段生産の増大の可能性を強調している。エンゲルス自身も生産力と人口の関連に言及す

<sup>57</sup> F.エンゲルス『国民経済学批判大綱』（『全集』第1巻）、543-545ページ。

<sup>58</sup> 同前、557ページ。続けて、「競争は、経済学の主要なカテゴリーであり、彼がたえずあまやかしかわいがっている最愛の娘である」とのべている。

<sup>59</sup> 同前、561-562ページ。

<sup>60</sup> 同前、562ページ。

るなかで、次のようにのべる。「マルサスは一つの計算をおこないそれを彼の全学説を基礎にしている。人口は……幾何級数的に増加するが、土地の生産力は……算術級数的に増加する。……だが、それは正しいか？……[「土地の広さ」や「労働力の増加」とう要素とともに、第三の要素としての科学がある]……科学の進歩は人口の増進と同じように無限であり、すくなくともそれと同様に急激である。……科学は、それに先だつ世代から残された知識の量に比例して、したがってもっとも普通の事情のもとでも同じく幾何級数的に進歩する。——しかも科学にとって不可能なことがあるだろうか？」<sup>61</sup> (下線は仲村)

みられとおり、エンゲルスは口を極めて、科学の進歩による生産力の増大——科学の物質化の増大にほかならないのだが——を高唱しつつ、マルサスの人口増殖論を批判している。エンゲルスはここでマルサスにおける人口の「幾何級数的増加」に倣って、科学の「幾何級数的進歩」を提示し、さらに、科学の物質化＝生産力化の客観的過程<sup>62</sup>にふれることなく、短絡的に科学の進歩と生産力の増大とを結合させている。こうした主張は難点を含むことは改めて指摘するまでもないが、荒削りではあれ、科学の生産力化の問題を正面に据えていることの意義は決して小さくはない。そして、ここにみられるエンゲルスの問題意識は、別の箇所では指摘されている、「労働に矛先をむける」科学についての問題意識<sup>63</sup>とともに、マルクスによって継承されるのである。

以上みてきたように、エンゲルスのマルサス人口論批判は“自由主義経済学”への批判の一環として展開されているのだが、1840年代の政治・経済状況、さらには時局をも視野におさめて論述されているため、時論としての色彩が濃いとわなければならない。そして、もっぱら“自由主義経済学”において特徴的な“競争”というカテゴリーに拘泥して——「拘束されて」というべきか——、議論をすすめる、科学の生産力化の問題は別として、資本の生産過程への視点を欠くものとなっている。しかしながら、マルサス人口論の階級的な性格やイデオロギー的性格を的確に剔抉した功績は大きく、これらは完全にマルクスによって継承されており、かくして、マルサス人口論批判の水脈において、前述のディケンズやワーズワース、プレイスらとは異なる特別の地位を獲得しているのである。

<sup>61</sup> 同前、565ページ。

<sup>62</sup> 科学の「生産力」化については、さしあたり次の拙著を参照のこと。仲村『科学技術の経済理論』（青木書店、1986）第3章。

<sup>63</sup> F.エンゲルス『国民経済学批判大綱』（前出）、568ページ。